

第3回 外国人児童生徒等の教育の充実に係る有識者会議

日本語指導や教科学習などにおける母語の活用などについて



桃山学院大学人間教育学部准教授
オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

中学校生活1997年1月～3月卒業

私 15歳（中等教育4年）→中学校3年生

兄 16歳→学齡超過（当時の校長先生の判断で入学）

弟 6歳（小学校2年）→保育園

•弟は母語よりも日本語の方が得意

同じ兄弟であっても、来日した年齢によって：

- 適応までの経験
- 日本語学習の過程
- 学校生活の状況等が異なる

中学校の国際教室：初期適応教室としての役割を果たし、学習者にとって居場所ともなっていた。
日本語学習：毎日継続して日本語を学び、短期間でひらがな・カタカナ、そして小学校1年生程度の漢字を習得した。



伊賀市内の中学校→ 上野高等学校定時制

1997年4月定時制高校進学

ほぼ日本語ゼロという状態で兄と高校に入学

(当時の校長先生の判断で入学)

授業内容の柔軟性: 学習者は兄と二人で学び、必要に応じて授業内容を柔軟に変更していた。

継続的な日本語学習: 継続的に日本語を学ぶ場が提供され、日本語能力試験(3級、2級)に合格し、大学進学を目指した。

- 日本語のみ使用
- 留学生向け教科書(スペイン語訳あり)
- 補助教材併用

支援体制の整備: 高校3年生からスペイン語学科の学生が支援に入り、母語によるサポート、通訳、翻訳の体制が整えられた。

- 曖昧にしか理解できなかった内容を、母語で補うことで正確に把握
- 理解のスピードが向上し、学習意欲にも良い影響

初期段階の支援

専門性と熱意のある人材による指導で日本語で学ぶ力を早く・確実に獲得

キャリア形成: 今の学習は将来とどう繋がるのか。

・担当の日本語教員は日本語が専門ではなかったが、熱意があり、教材を一から作成していた。最初は漢字の勉強、途中から日本語能力試験の教材を使った。

母語支援者としての経験

- 来日間もない子どもへの支援
- 母語支援は子どもの安心感につながり、教科の学習参加をサポートする。
- 子どもの反応はさまざま
- 楽しみにしている子もいれば、最初は嫌がる子も学習の理解が進むと、受け入れやすくなる
- ↓
- 学校環境にも左右される、
- 日本人児童生徒の理解や態度が影響、
- 母語支援者を「先生」として見ているかどうかで違いが出る

周囲の理解もカギとなる



母語の力を活かした日本語学習支援 ～資質・能力の育成に向けて～

・予習重視の個別支援

限られた支援体制の中でも授業についていけるよう、担任と連携し授業内容を共有し個別に対応。

・教材の工夫

教科書・資料の翻訳やリライト教材を活用（カスタネット多言語資料も参照）。

・語彙リストの活用

継承語＋日本語の語彙リストを作成（中学生には英語も併記）。

・家庭との連携

母語で内容を補足したプリントを配布し、保護者にも説明と協力を依頼。



大学生になって気づいた言葉の価値

- 大学生になってから **母語の大切さを再認識**
学校で母語を使うと「からかわれる」「恥ずかしい」と思い、使用を避けていた
→ このような経験から、以下のような環境づくりの重要性を感じている:
- バイリンガルであることを励まし、肯定する学級づくり
- 様々な言語をリスペクトする、多文化・多言語に開かれた教育環境

二つ以上の言語に触れて育つ子どもたちの持っている多様な能力や可能性を育む環境、自信を持たせ、言語を学ぶ意欲を高める、バイリンガリズムを奨励する学校作りが必要不可欠となる(グロジャン 2018)。

→バイリンガルの力を伸ばす環境づくり

母語をなくさない日本語教育、両言語とも大切にする日本語指導
(真嶋、2019)

→子どもたちの母語を活用し、同時に保持していく

言語的・文化的多様性の尊重と母語継承の重要性

- 母語・継承語に触れる機会や国際理解教育（複言語・異文化間教育等）が重要である。
- → しかし、人材や体制が整っておらず、実施が困難なところもある。
- 多言語環境を実現するために以下の取り組みが可能と考えられる：
 - - バイリンガル児童を励ます環境づくり
 - - 交流の時間の設定
 - - 多言語に触れる機会の創出



- ・放課後ではなく、正規の授業時間内
- ・（例：「**総合的な学習の時間**」）に位置づける
国際理解教育（複言語・異文化間教育・多文化共生等）と関連付ける）
- ・日本人児童にとっても：
 - 言語能力・読解力の向上が期待される
 - 異なる言語への関心が育まれる可能性
 - 外国語＝英語だけではないと気づかせるきっかけ。



- 子どもたちの強みを活かすために
- 子どもたちが持っている強みに気づかせる環境の提供
→(コミュニケーション力、適応力等)
- 多様性を活かす場の創出
子どもたちの自尊心を高める活動が重要
- 将来を見据えた指導が必要
早期支援で、子どもたちが将来の展望を描けるように
- キャリア教育の実践
仕事の内容や働く意義を学び、将来について考えるきっかけを提供

自信を持てる教科があることがモチベーションに

- └中高生の多くが英語を得意科目として挙げている
- └インタビュー11名中6名が英語に自信を持ち、
同級生や教員から「発音がきれい」と評価された
(オチャンテ, 2020)

母語支援の現場が抱える課題

- 母語支援者の確保が不安定
- ・ 支援者の数が足りない
- ・ 雇用や待遇の不安定さ
- ・ ⇒ 支援員（登録日本語教員等）の現状把握
- 支援者の研修・育成の必要性
- ・ 指導の質を高める研修機会が不足
- チームで子どもを支える
- ・ 母語支援者にすべてを任せるのではなく、日本語教育や教科学習の専門家と連携する
- ・ 教員・支援者が協力し合う体制づくり
- ・ 役割を分担し、相互に学び合う関係が重要

連携のあり方と効果的な取り組みの紹介

母語継承に関する課題と提案

- 来日直後の子どもたちが急速に母語を失っていく。
(現場の声から)
- 日本で生まれ育った子どもも母語力が乏しい。
- 保護者と子どもの意思疎通が困難になるケースが多い(特に高校生以降)。

「～いつも不安になって分かるかと確認しているね。大きくなると、問題も大きくなる、それが心配で、彼との会話が途切れないように、心から通じ合うために彼の気持ちを常に確認している。毎回後悔することがあるよ。他の親子が流暢に会話している姿を見ると、もっと深い会話を持てたらなと」

保護者のインタビューの一部 (オチャンテ、2022)

保護者の語りからは、大人になりつつある息子と「心から通じ合い」、「コミュニケーションが途切れない」ように、常に関係を保とうとしている様子がうかがえる。



先行研究から見える家庭の役割

- 子どもの二言語力を育む上で**家庭環境の影響が最も大きい**(友沢 2019)
- **家族やコミュニティは、家庭内言語の維持に不可欠な役割を果たす**(Fishman 1991)

- ・ 第一世代の保護者は皆、子どもの健やかな成長、日本語の習得、母語の保持を強く望んでいる。
- ・ さらに、英語などの第3言語に触れることを期待し、語学スクールに通わせるなどしている家庭もいる。
- ・ 保護者の中には、ペルーから教材を持ち帰り、スペイン語を教えようと試みる者もいる。(オチャンテ、2023)

⇒しかし、

- ・子どもが積極的に取り組まず、うまくいかなかったという語りもある。

幼少期において、継承語の重要性を理解できず、その学習を負担に感じる子どもは少なくない。

- ・経済的な余裕のない家庭では、無理をして高校受験の塾や英語教室に子どもを通わせるものの、授業料を払い続けることができず、長続きしない。
- ・親子で過ごす時間が限られていること
- ・家庭の外で継承語を使う機会が極めて少ないこと

保護者や家庭の工夫や努力だけでは、母語を維持するのは難しい



母語継承と多言語環境の重要性

学校・地域・行政・NPOが連携し、多文化共生を目指した学校づくりや地域理解の促進を図ることで、以下の取り組みが可能と考えられます。

- バイリンガル児童を励ます環境の整備
- 学校内外での交流の場の設定
- 多言語に触れる機会の創出



最後に 当事者の体験から

- 同じ文化背景を持つ仲間、同じ言葉を話す仲間の存在は、初期適応において大きな支えとなった。
- 一部の教員からは「日本語習得の妨げになる」との指摘もある。
- （→同じペルー出身で、日本語・スペイン語に堪能な女子生徒に依存・支えられたことで、安心感を得られ、学級生活の負担が軽減された。）
- 日本語に自信がついたことで、日本人生徒との関係が深まった。日本語力の向上により、「日本人生徒と私」の直接的な関係を築けるようになった。
- 日本語も母語も中途半端で、来日後にポルトガル語や英語も学んだが、どれも十分に習得できていないと感じ、劣等感を抱いたことがある。第二言語習得の研究を通じて、その過程と困難を理解し、自分を受け入れられるようになった。このような状況に対して、当事者本人だけでなく、保護者や教員の理解も求められる。

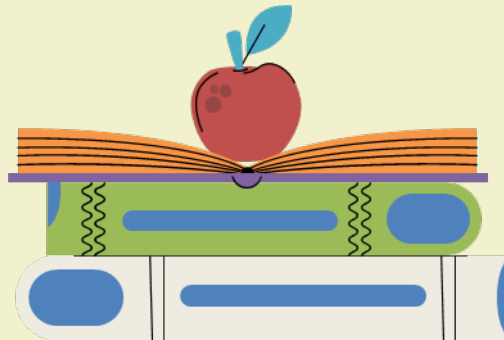


- ・ 母語を継承できず、「もったいない」と言われて傷つく子もいる。国籍で言語能力を決めつけない配慮が必要だ。
- ・ 日本語にも継承語にも課題を感じている子どもや若者(すでに保護者となっている第二世代も含む)への支援が求められる。日本語の学習は一生続くものであるという理解も必要だ。

- ・ 日本語の習得や異文化への適応にはストレスが伴う
- ・ 家庭の事情や背景もさまざまである

こうした状況の中で日本で将来を築いていくためには、孤立を防ぎ、子どもや移民家族への包括的な支援が不可欠である。

ご清聴
ありがとうございました。
¡ Muchas gracias!
Muito obrigada!
Merci beaucoup!
Thank you very much!



参考文献

- 大山万容[編](2022)「多言語化する学校と複言語教育 複数の言語と文化を生きる子どもの教育支」明石書店
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス(2023)「移民第2世代のキャリア形成支援における展望と課題 ―コミュニティにおける実践の記録」, 樋口直人／稲葉奈々子[編]『ニューカマーの世代交代―日本における移民2世の時代』明石書店, pp. 127-151.
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 「移民第二世代の進路選択・キャリア形成支援における課題―三重県の事例を中心に―」 桃山学院教育大学研究紀要第3号 2020年
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 「複言語環境にある家族とカトリック教会の役割」 桃山学院教育大学研究紀要「エレノア」第5号 2022年
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス (2023) 「複言語環境で言語継承する親子の課題・方策・キャリア形成」『ことばと文字16号：地球時代の日本語と文字を考える』くろしお出版
- 友沢昭江(2019)「家庭言語環境調査から見える子どもの二言語能力―1年時と6年時の保護者へのアンケートとインタビューを通して」, 真嶋潤子[編]『母語をなくさない日本語教育は可能か―一定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会, pp. 119-157
- 樋口直人／稲葉奈々子(2018)「間隙を縫う―ニューカマー第二世代の大学進学」『社会学評論』272, pp. 567-583.
- 真嶋潤子[編](2019)『母語をなくさない日本語教育は可能か―一定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会
- 文部科学省(2020)「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議の提言 報告書(概要) 令和2年3月」<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/151/mext_00255.html> (2022年10月12日閲覧)
- NP0 法人おおさかこども多文化センター (2019) 外国につながる子どもを元気にするための実態調査報告書 ～大阪の日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜実施校の高校生へのアンケート・インタビューから見えてきたこと～
- グロジャン, フランソワ(2018)『バイリンガルの世界へようこそ―複数の言語を話すということ』西山教行[監訳], 勁草書房
- カミンズ, ジム／中島和子(2011)『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾大学出版会
- Baker, C. (2006) *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Fishman, J. A. (1991) *Reversing Language Shift: Theoretical and Empirical Foundations of Assistance to Threatened Languages*. Clevedon, England: Multilingual Matters.

